

大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：坂本 一真（臨床心理学コース）

■ 研究題目
いじりのリスク評価尺度の作成 —信頼性・妥当性及びカットオフ値の検討—
■ 研究代表者・分担者 氏名
坂本 一真（臨床心理学コース）
■ 研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）
【問題と目的】 「いじり」という言葉は日本における俗語である。1980年代に芸能関連の用語として登場し、次第にインフォーマル・コミュニケーションにおける方略の1つを指して使用されるようになった（兼高, 2001; 吉澤, 2020）。いじりは、一定の対人関係機能を有するものとして日常的に利用されてきた一方で、「いじめ・ハラスメント」問題との関連の中で議論され、病的なコミュニケーション行動に陥る危険性が指摘されてきた（土井, 2008; 田中, 2010; 團, 2013; 木村, 2017; 望月, 2017; 中野, 2018; 吉澤, 2020）。いじりに関する研究は、これまで主にその現象理解に向けて探索的に進められてきた（森口, 2007; 土井, 2008; 土井, 2009; 向井, 2010）。しかし、未だいじりという現象の統一的な概念定義は示されておらず、類似概念である「からかい」と同一概念として扱っている研究も少なくない（土井, 2008; 團, 2013; 望月, 2017; 吉澤, 2020）。その結果、いじりは実証的研究の俎上に載せられず、いじめ問題やハラスメント問題への移行の対策も示されていなかった。本研究の目的は、いじりの類似概念との関係を整理し定義した上で、いじりが病的コミュニケーションになっているリスクを測定する尺度を開発することが目的である。
【実施内容】 対象者は、18～35歳の913名（男性：327名、女性：583名、その他：3名、平均年齢29.25±4.72）。クラウドソーシングサービスを利用した、質問紙調査を実施した。調査時期は、2020年8月である。本調査は東北大学大学院教育学研究科研究倫理審査委員会の承認を得ている（承認ID：20-1-010）。

調査内容は、(1) フェイスシート、(2) いじられ経験の定義の提示と確認、(3) 想起したエピソードに関する質問、(3) いじりのリスク評価尺度 PartA 侵襲性、(4) いじりのリスク評価尺度 PartB 行動抑制、(5) ストレスの認知的評価尺度 (岡安, 1992)、(6) 包括的ストレス尺度 (浅井ら, 2013)、(7) 特定の状況における冗談に対する反応尺度のうち「迎合的反応」因子 (葉山・櫻井, 2010)、である。

本研究では「いじられ経験」を“1) 仲間内での遊びとして認識していたこと、2) 行為者に傷つける意図は無いと認識していたこと、3) 程度の差はあれ困った思いを経験したこと、の3点を満たす経験”として定義した。

(5) ~ (7) は妥当性検討に用いる。妥当性検討における仮説は、「1. PartA の得点が高いほど、ストレスの認知的評価尺度得点、および包括的ストレス尺度得点が高い」、および「2. PartB の得点が高いほど、冗談に対する反応尺度のうち「迎合的反応」得点が高い」である。(3) および(4) の尺度は、いじりに関する先行研究 (土井, 2008; 土井, 2009; 向井, 2010; 木村, 2017; 中野, 2018) を元に著者が項目作成した後、複数の研究者と内容的妥当性を検討し選定された項目で構成されている。

【結果】

〈いじりのリスク測定尺度の因子構造の検討〉

PartA 侵襲性の尺度では、天井・床効果が確認されなかった 16 項目に対して、最尤法・プロマックス回転による探索的因子分析を実施した。スクリープロットから、2 因子構造が妥当であると判断された。因子負荷量.35 を基準に項目を抽出したところ、1 項目が除外された。項目内容から、第 1 因子を「否定的情動反応」、第 2 因子を「アイデンティティへの侵襲」と命名した。信頼性を検討するために、抽出された因子ごとに信頼性係数を算出したところ、第 1 因子 $\alpha=.963$ 、第 2 因子 $\alpha=.932$ であり、十分な信頼性を示した。因子間相関は、 $r=.827$ であった。

PartB 行動抑制の尺度では、天井・床効果が確認されなかった 30 項目に対して、最尤法・プロマックス回転による探索的因子分析を実施した。スクリープロットから、4 因子構造が妥当であると判断された。因子負荷量.35 を基準に項目を抽出した所、2 項目が除外された。項目内容から、第 1 因子を「リスク回避」、第 2 因子を「利益の享受」、第 3 因子を「無力感」、第 4 因子を「役割演技の優先」と命名した。信頼性を検討するために、抽出された因子ごとに信頼性係数を算出した所、第 1 因子 $\alpha=.921$ 、第 2 因子 $\alpha=.915$ 、第 3 因子 $\alpha=.742$ 、第 4 因子 $\alpha=.861$ であり、十分な信頼性を示した。第 1・2 因子の因子間相関は $r=.326$ 、第 1・3 因子の因子間相関は $r=.605$ 、第 1・4 因子の因子間相関は $r=.608$ 、第 2・3 因子の因子間相関 $r=.406$ 、第 2・4 因子の因子間相関は $r=.691$ 、第 3・4 因子の因子間相関は $r=.508$ であった。

〈いじりのリスク測定尺度の妥当性の検討〉

PartA 侵襲性の尺度の妥当性を検討するため、ストレスの認知的評価尺度、および包括的ストレス尺度との相関分析を行った。その結果、「否定的情動反応」因子は、ストレスの認知的評価尺度の「影響性」と有意な正の相関 ($r=.521, p<.001$)、「妨害性」と有意な強い正の相関 ($r=.788, p<.001$)、「脅威性」と有意な正の相関 ($r=.696, p<.001$)を示した。また、「否定的情動反応」因子は、包括的ストレス反応尺度の「不安・緊張」と正の相関 ($r=.594, p<.001$)、「不機嫌・怒り」と正の相関 ($r=.638, p<.001$)、「自律神経症状」と弱い正の相関 ($r=.379, p<.001$)、「災害時特殊ストレス反応 (PTSD 様反応)」と正の相関 ($r=.542, p<.001$)を示した。「アイデンティティへの侵襲」因子は、ストレスの認知的評価尺度の「影響性」と有意な正の相関 ($r=.621, p<.001$)、「妨害性」と有意な強い正の相関 ($r=.749, p<.001$)、「脅威性」と有意な強い正の相関 ($r=.763, p<.001$)を示した。また、「否定的情動反応」因子は、包括的ストレス反応尺度の「不安・緊張」と正の相関 ($r=.645, p<.001$)、「不機嫌・怒り」と正の相関 ($r=.592, p<.001$)、「自律神経症状」と弱い正の相関 ($r=.479, p<.001$)、「災害時特殊ストレス反応 (PTSD 様反応)」と正の相関 ($r=.597, p<.001$)を示した。よって、妥当性検証における仮説が支持され、PartA 侵襲性の尺度の妥当性が確認された。

PartB 行動抑制の尺度の妥当性を検討するため、特定の状況における冗談に対する反応尺度のうち「迎合的反応」因子との相関分析を実施した。その結果、「リスク回避」は有意な正の相関 ($r=.456, p<.001$)、「利益の享受」は有意な正の相関 ($r=.410, p<.001$)、「無力感」は有意な弱い正の相関 ($r=.390, p<.001$)、「役割演技の優先」は有意な正の相関 ($r=.565, p<.001$)を示していた。よって、妥当性検証における仮説が支持され、PartB 行動抑制の尺度の妥当性が確認された。

〈ストレス症状発現に関わる PartA のカットオフ値の検討〉

いじりによってストレス反応を呈する被行為者を抽出するための指標となるカットオフ値を設定するため、包括的ストレス反応尺度を状態変数とした ROC 分析を行った。包括的ストレス反応尺度のうち、一般ストレス尺度は 2 時点のカットオフ値が設定されており、一般ストレスが「低い」「中程度」「高い」の 3 段階に分けられている。「高い」に分類される者は、少なくとも 1 項目以上「かなりあてはまる」と回答している者であり、ストレス症状が発現している者を抽出する上で有効なカットオフ値であると考えられたため、本研究では「中程度」と「高い」感に設定されているカットオフ値を元に、PartA 侵襲性の尺度のカットオフ値を設定する。Youden Index を算出したのち、この値が最も大きい点数をカットオフ値とした。その結果、感度 (.745)、特異度 (.735) の両者の値から、PartA 侵襲性の尺度の合計得点において、53 点をカットオフ値として採用した。本研究では、PartA のカットオフ値を超えた者は 440 名であり、包括的スト

レス尺度の一般ストレス反応尺度の「高い」群に分類された者は 412 名であった。

また、包括的ストレス反応尺度のうち、災害時特殊ストレス反応（PTSD 様反応）尺度は、1 時点のカットオフ値が設定されており、PTSD 様反応が「低い」「高い」の 2 段階に分けられている。「高い」に分類される者は、少なくとも 5 項目で「いく分あてはまる」と回答している者である。いじりが被行為者にとってトラウマティックな出来事であるかどうかを判断する上で有効であると考えられたため、本研究では災害時特殊ストレス反応のカットオフ値を元に、PartA 侵襲性の尺度のカットオフ値も設定することとした。Youden Index を算出したのち、この値が最も大きい点数をカットオフ値とした。その結果、感度 (.684)、特異度 (.789) の両者の値から、PartA 侵襲性の尺度の合計得点において、54 点をカットオフ値として採用した。本研究では、PartA のカットオフ値を超えた者は 414 名であり、包括的ストレス尺度の一般ストレス反応尺度の「高い」群に分類された者は 468 名であった。

【考察】

以上の結果より、本研究で作成した、いじりのリスク評定尺度の十分な信頼性と妥当性が確認された。また、包括的ストレス尺度得点を用いて、PartA 侵襲性の尺度におけるカットオフ値が算出された。

【今後の課題】

本研究で作成した尺度は、いじりが病的コミュニケーションをもたらしている程度について客観的にアセスメントするツールであり、学校や職場などのいじりが用いられる現場におけるリスクアセスメントツールとして利用可能である。本研究では青年期の発達段階（18～35 歳）を対象に尺度開発を行った。いじりは現代青年に特徴的なコミュニケーション様式として指摘されているものであり、対象者の選定には一定の妥当性があると言える。しかし、児童期においてもいじりが用いられていることを踏まえると、小・中学校などの教育現場に本尺度を実装する際には、児童期の発達段階にある者を対象者とした調査によって、発達段階を考慮した形で尺度を改善する必要があるだろう。

また、本研究で作成した尺度によって、いじりのリスク関連要因について、実証的な研究が可能となるだろう。どのような要因がリスクを高めるのか、そしてリスクの高いいじりは被行為者の精神的健康にどのように影響を与えるのかを、今後実証的に検討していく必要があるだろう。

【引用文献】

浅井継悟・森川夏乃・平泉拓・宇佐美貴章・若島孔文（2013）. 包括的ストレス反応

- 尺度作成の試み. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 62 (1), 283-302.
- 團康晃 (2013). 指導と結びつきうる 「からかい」. ソシオロジ, 58 (2), 3-19.
- 土井 隆義 (2008). 友だち地獄-“空気を読む”世代のサバイバル- 筑摩書房
- 土井 隆義 (2009). キャラ化する/される子どもたち-排除型社会における新たな人間像
- 岩波書店
- 葉山大地・櫻井茂男 (2010). 冗談に怒りを感じた場面における聞き手の反応を規定する要因の検討—拒否に対する感受性, 話し手との関係性, 周囲の反応に着目して—
— 教育心理学研究, 58(4), 393-403.
- 兼高 聖雄 (2001). 「素人いじり」を楽しむ視聴者心理特集 「参加」→「いじり」→「覗き」
—バラエティ番組の新しい動向— ギャラク, 379, 32-35.
- 木村雅史 (2017) 「いじめ」と「いじり」をめぐるドラマツルギー 「状況の定義」と自己呈示の関連性に着目して. 社会学年報, 46, 33-43.
- 森口 朗 (2007). いじめの構造 新潮社
- 中野 円佳 (2018). 上司の「いじり」が許せない 講談社現代新書
- 岡安孝弘 (1992). 大学生のストレスに影響を及ぼす性格特性とストレス状況との相互作用.
健康心理学研究, 5 (2), 12-23.
- 田中イデア (2010). お笑い芸人に学ぶ いじり・いじられ術 いじり上手は信頼される、
いじられ上手は出世する リットーミュージック
- 吉澤 英里 (2020). 「いじり」に関する一考察: 新聞記事の内容分析から. 環太平洋大学
研究紀要, 16, 197-204.
- 望月正哉・澤海崇文・瀧澤純・吉澤英里.(2017). 「からかい」や「いじめ」と比較
した「いじり」の特徴. 対人社会心理学研究, 17, 7-13.